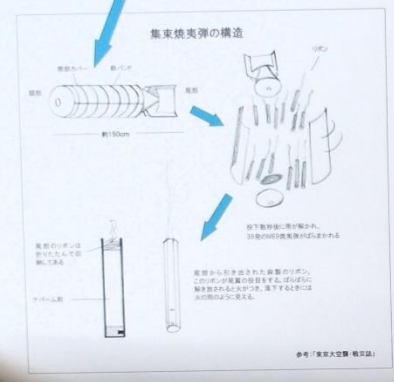


ナガサ

長崎原爆をたど

B29から落とされる焼夷弾



焼夷弾(しょういだん)

世田谷区立平和資料館所蔵  
日本の都市を焼きつけた爆弾は焼夷弾でした。木造の家が多い日本では、火災が起ると大きな被害を受けることから、アメリカが日本を攻撃するために開発し、家が密集した場所ではとくにその威力を発揮しました。  
もっとも多く使われた焼夷弾はM69と呼ばれるものでした。正六角形をした筒の中に入っているナバームはガソリンの一種で、火がつきやすく高熱を放して長時間燃え、猛烈な火災を起こしました。発火した後は、水をかけるとかえって炎が大きくなるので、砂や泥などをかぶせた上に、ぬれおしりで押しつぶすしか手はありませんでした。



焼夷弾 実物です



#### 4. 言問橋炎上

炎から逃れるために橋の上からも岸からもたくさんの人々が川に飛び込んだ。川の中からは言問橋が燃えているよう見えたが、実際は人や荷物が燃えていた炎だったのだと朝になって狩野さんは思った。はじめは干潮で川底に足がついたが、潮が満ちてくると次第に多くの人が溺死したり、凍死していった。(狩野さん談)  
 時は40年ぶりの異常寒波が到来していた。この日は風が強く、のまわりが早かったためみるみる延焼した。



#### 20. 湯の花トンネル、車外

1945年8月上旬、東京駅発の中央本線419列車は炎雲の中、満員で浅川駅(現 高尾駅)を出た。出発してすぐ湯の花トンネルにさしかかった時に、硫黄島を進発したアメリカP51戦闘機の攻撃を受け、機関車と一両目の半分がトンネルに入ったところで停車。むき出しになった後続の車輪はP51の思いがままの機銃掃射を受ける。乗客は軍人、軍属、工具、一般老幼婦女子、車内は人肉が飛び散り、血の池となった。車外に逃れた者も狙い撃ちされ、背負った子どもが頭を撃たれて死んでいるのに気づかず呆然としている母親もいた。(この作品は「中央本線419列車」(斉藤勉著)をもとに描かれたものです)